

# ひらほく新聞



「ひらほく新聞」で検索！  
 ★ホームページ・ひらほくランド★  
<http://www.hirahoku.com/>  
 ☆バックナンバー含め「ひらほく新聞」を  
 閲覧・ダウンロード可能です！

発行所 読売センター平塚北部（ひらほく）山本 直 〒254-0013 神奈川県平塚市田村9-4-32 電話 0463-54-2807

想いの込め  
 願いの込め  
 祈りの込め  
 今日私の  
 居場所  
 一歩を踏み出す

◎筆文字の師匠・たまちゃん（小玉 宏さん）の言葉をTTP！（徹底的にバクル！）

熊本・大分地方で続いて起きた熊本地震で、命を落とされた方のご冥福をお祈りいたしますとともに、被災された方々には心からお見舞い申し上げます。  
 現在も余震が続いており、避難生活を余儀なくされている多くの方々の健康や精神面もたいへんに心配です。一日も早く平穏な日々が訪れますように切にお祈りいたします。

## 祈りを届ける

甚大な被害が起きている熊本地震のニュース報道を見るたびに、九州の人たちのために、何をしたらいいのだろうか？と思ひ悩んだ方も多かったのではないのでしょうか。

私たちにできること。「寄付をする」「物資を送る」「ボランティアに駆けつける」「確かな情報を伝え広める」……。それを十分にできないことを決して悩む必要はないと思います。  
 まずは、手を合わせ『祈り』を込めて『想い』を送り続けることが大切だと思います。  
 「どうか断層のパワーが収まりますように」「一日も早く穏やかな日常を取り戻せますように」

## 世界は、想いの総和で創られている

これまで何度かご紹介してきましたサンマーク出版の鈴木七沖編集長が、プライベートで発信されているメッセージをご紹介します。

## 世界を変えるための「種」

たとえば一昔前……わたしたちは自分の気持ちを誰かに伝えることが難しかった同じように相手の気持ちを知らず知らずのうちに隣りの町や村がどうなっているのか

もつと遠く、隣の国や地球の反対側にある国のことを知るために計り知れないほど膨大なエネルギーが必要だった個人の思いなんてちっぽけなもの大きな力に身を委ねるしかなかった今、わたしたちは世界を縮めるための幾つかの方法を手に入れている

小さな一粒の「種」がこの世界を変えていくきっかけになることをいろいろの方法で共有したいからプライベートサイトを立ち上げてみました

## 「世界は、想いの総和で創られている」

小さな「種」まき  
 あなたもいっしょに



たった一人の気持ちを何千人、何万人、何億人で共有することだってできるしこれまでの世界が数十年かけて変化していった様を数年、いや数か月で感じることもできてそれがどのように進化していくのかきつと誰もが感じられるはず

決して小さなことではないと思います。私たちが住んでいる世界は、すべて人間の「想い（思い）の総和」で成り立っています。「想い（思い）」が具現化されて形になったものが、見えているこの世界です。私たちがみんな「想い（思い）」の力を知っているはずです。

そしてわたしたちは体験を通して知るでしょうこの世界がどうやって創られていくのかをこの世界がどうやって変わっていくのかを世界を変えるための「種」とは小さな思い、小さなアイデア、小さな行動、小さな出会い、小さな創造、小さな共有……どんな芽が出て、どんな花を咲かせるのか

「平安を祈ること」「無事を祈ること」「鎮魂を祈ること」誰かが誰かを想いながら祈る。それだって、必ず大きな力になると思います。状況が少しでも早く穏やかになりますように。助け合う気持ちが深いところまでつながり合いますように。祈りを捧げつづけます。(おわり)

## 視座を高めよう

いまできる大切なこと、もう一つ。それは……与えられた目の前のことを心を入れて全力でやり切ること。

愛読誌月刊致知五月号より、羽田空港を世界一清潔な空港に認定されるまでにした、日本空港テックノ所属環境マイスター新津春子さんのインタビューからどうぞ。

子供が使うところ汚れるのか、ご年配の方の場合はこうだ、ということが分かってくる、使う人のことを見据えて掃除のやり方を工夫できるようになったんですよ。その結果、日本一を獲得することができました。それからですね、自己満足の清掃ではなく、お客様のためにする清掃に転換したのは。

「気持ちを込める」という自分に欠けていたものに気づいてから、清掃技術の向上だけに留まらず、もっともっと自分を高めていこうという意識に拍車がかかりました。私たちが空港の清掃員はお客様からいろんなことを頼まれるんです。だから、清掃とは関係ないことであっても、お客様から言われたことは断らないで全部やっっていく。そういうことは意識して

識しています。

断ること自体が自分には許せないというか、断ったらプロじゃないと思うんですね。もちろん私にはできないようなことも中にはあるわけですから、それを断らないでやるためにはどうすればいいかって考えて、やっぱり日々プラスアルファの努力を積み重ねる。

あと、清掃に関しては、赤ちゃんが床でハイハイしても大丈夫なくらい綺麗にしようって心掛けています。心を込めなければ綺麗にはできませんし、そこは妥協せずにやっています。どんな仕事でも心を込めてベストを尽くす。そうすることで、お客様は喜んでくれると思うの。

私としてはただ目の前の仕事をとにかく笑顔でコツコツ一所懸命やること。そして、日々目標を立てて、それに向かって努力して、達成して、また次の目標を立てる。そういうことを大切に生きてきただけです。

実は四年前、鈴木常務はがんで亡くなってしまいました。常務がいなければ、私はこの会社に入っていないですし、ここまで成長することもできませんでした。その常務にご恩返しするために、私はこれからはずっとこの会社で清掃の仕事を続けることに、自分が培ってきたものを次の世代に引き継いでいきたいと思ひます。(おわり)

# 一流の日本人を めざして

みやぎき中央新聞の4月4日号社説に、岐阜県にある株式会社ニサケの会長・松岡浩さんの発行されている小冊子が紹介されていました。たいへんに素晴らしいお話でしたので、さっそく小冊子『一流の日本人をめざして』をFAXにて注文すると、何と松岡会長自らお電話をいただき「びっくりばん!」、有難くご挨拶をさせていただきました。若者へ向けた23本のエッセイの中から一編を紹介させていただきます。

## 成長は

## 素直さに比例する

平成二十四年十一月、依頼を受けて、山形県のS社へ講演に行きました。その際にS社の社内報を見せていただいたので、私の読後感を辛口で語ったところ、社長から「後日、当社の社内報、数ヶ月分をお届けしますので、ご指導をお願いします」と依頼されました。

数日後に届いたその社内報を推敲して、赤ペンを入れました。「難しい文字や外来語が数多くあり、読者の目線ではなく、作成者の目線になっている」「紙面がゴチャゴチャしていて、余白の美」がない」「太字(G体)ばかりで読みづらい」「写真には必ず説明文

を入れる」等々の指摘をしたのです。

翌年の正月にS社から一月分の社内報が届きました。驚いたことに、私が指摘したことを素直に受け入れ、一流の紙面となっていたのです。紙面が輝いて見えました。すぐに、社内報の若い担当者に称賛の言葉を贈りました。「感心しました。凄いですね、他人の言葉はなかなか素直に聞けないものですが、あなたの脱皮の素晴らしさには、ほとほと感服しました」と。そして、一夜にして、蛹が蝶になることを表した「蛻変」という言葉を思い浮かべました。

私は、趣味で数多くの会社の社内報に赤ペンを入れていますが、無反応の会社が多くて「がっかり」しています。でも、数社は発刊毎に成長を続けてくださり、元気をもらっています。今回のS社の「蛻変」は新しい年の最初の大喜びであり、休日を返上して努力し推し進めた甲斐がありました。成長をしたいならば、他の人の忠告を素直に聴くことが大切です。「成長は素直さに比例する」の言葉を改めて強く感じました。そして「努力は人を裏切らない」「過去は変えられないが、未来は変えることができる」。これからお節介を続けていきます。

「中学生の頃、野球部の主力をやっていました。1年間で全ての部員が成長しましたが、それぞれの成長の度合いが違っていました。その基準は素直さにありました。他人の指摘を素直に受け入れられた人は一目で分かるほど成長してました。しかし、他人の指摘を聞こうとしない自分勝手な人は成長の度合いが小さかったです。自分にこのような経験があったので、この本の中の『成長は素直さに比例する』という言葉が強く印象に残りました」

「パパが倒れた」。メール受信ボックスには目を疑った。その内容を現実として受け入れられないまま、私は外出先から病院まで全力疾走した。そして待合室にいた家族の顔を見るとたちまち「なんで?」という言葉と涙が溢れた。息を整えて緊急治療室に入るとたくさんの機器に囲まれて目を閉じている手術後の父が目に入ってきた。大柄な父に似合わないその姿に目を背けてしまいたいようになりながらとどめどなく流れてくる自分の涙に自分自身驚いていた。そう、父は脳内出血で突然倒れたのだ。その日の看護師さんの名札にはYと書かれていた。

自分も常々『素直さ』がとても大切だと感じています。「実るほど頭を垂れる稲穂かな」という通り、何かの成功の後こそ、変わらざるどころも素直に学ぶ姿勢が重要だと、改めて教えていただきました。

翌日父は頷くことも喋ることも僅かながら出来ていました。弟の少年野球チームのコーチをしていた父は「ここはどこですか?」と聞かれると「にいがた」と言っていた。新潟は野球チームの合宿予定地だった。こんな時でも野球のことを考えているんだと思うと思わず笑ってしまつて「ここは埼玉だよ」とみんなにツッコミを入れられていた。

2日後、私は母の「今日休んだ方がいいんじゃないの?」という忠告を無視して部活に行った。筋トレが終わり後はブラシ掛けをすればお昼ご飯という時に私はコートブラシに左足を引つ掛けた。真っ赤になった自分の足首と靴が目に入った。私は頭の中が真っ白になった。当時私の肩を組んで支えてくれた友達によると私はひどく震えていたらしい。当時の記憶は曖昧だが立ってないと感じた時——お父さんがああいう状態なのに家族にさらに迷惑をかけることになるかもしれない——という強い恐怖と不安が痛みより先に私を襲ったのは確かだった。診察の結果、左アキレス腱断裂と告げられた。

いる女性がいた。看護師のYさんだった。

8月11日、父は熱はあるものの一般病棟に移された。父は大きな目を見開いて家族写真を見たり、私が祖母にツッコミを入れると「またやってるよ」と言わんばかりに微笑んだり、野球のボールを握ったり、寝返りを打ったりと奇跡とも言えるべき回復力を見せた。

8月13日、この日は昼にかなりの高熱を出し前日ほどの反応は見せなかったが、私の利き手である左手を強く握ってきた。私は驚きとともに無理しているのではと心配になり「わかってるよ、わかっているよ」と握り返した。本当は何もわかっていなかったことに。

8月14日、CT検査をしに行こうとした時父の容体は急変。脳室が爆発し機能しなくなつてしまった。「生きていても植物状態」「今夜が山」という私には受け止めきれない言葉が飛び交った。しかし、父は最期まで他人思いだった。私達家族が気持ちの整理がつくのを待つかのように、お医者さんの予想をはるかに上回り3日間ずっと脈を打ち続けた。私達家族も3日間病院の待合室で寝泊まりさせて頂いた。

8月17日午後4時半頃。心拍数が急に下がっていき、耳に付く程聞いたピッピッという音ともう動かない心臓に空気を送り込む機械音が耳で響きながら「午後4時45分ご臨終です」という声が聞こえてくる。やがてその音は溜め息となり、嗚咽へと変わっていった。椅子に座っている母の背中をYさんがさすっている。母の背中はいつより小さくて少女のように見えた。父の体を拭き始めると家族の口から次々に出てくる「ありがとう、お疲れ様」。まだ温かい父の顔は優しく、堂々としていた。父と共に緊急治療室を後にする時、Yさんが私の肩を叩いて「頑張つてね」と言った。その時、私の目に映ったYさんの表情は複雑で言葉では表せないものだった。ただ「Yさんに胸を張ってお礼を言える人になろう」と思うた。

## 「中三の夏」

佐藤 颯子 (15) 埼玉県

夏。それは一年の中で最も盛り上がる明るい季節。しかし去年の夏だけは違った。夏。それは一年の中で最も盛り上がる明るい季節。しかし去年の夏だけは違った。

## 壮絶な医療の現場……

「Yさんに胸を張ってお礼を言える人になろう」と思った。このメッセージが大切なことを全て伝えてくれていきます。